

【事例紹介】

多文化協働学習授業の成果と課題

—誰のための何のための地域活動なのか—

Achievements and Problems of a Multicultural Collaboration
Learning Class: Community Activity for Whom and for What?

茨城大学人文社会科学部准教授 横溝 環

YOKOMIZO Tamaki

(Associate Professor, College of Humanities and Social Sciences, Ibaraki University)

キーワード：多文化共生社会、PBL、媒介、地域活動、継続

はじめに

本稿は、茨城大学COC (Center of Community) 事業の中の、地域志向教育支援プロジェクトの一環として2015年度(4月～7月)に筆者が人文学部¹(水戸キャンパス)において開講したPBL (Project/Problem Based Learning: 課題／問題解決型学習) 授業「地域社会と異文化コミュニケーション」における成果と課題を示すとともに、留学生と地域活動の関わりについて考察していくことを目的とする²。

1. 授業の概要

1-1. 授業の目標

本授業は、行政機関、市民団体、学校、商業施設、地域住民等における多文化共生に関する諸問題を明らかにし、それらの解決に向けて具体的かつ実行可能な企画を立て実行に移していくことを目的としている。2015年度は、PBLにPLA (Participatory Learning and Action: 参加型学習行動法)の要素を取り入れ授業をデザインした。勝間(2000)は、PLAで期待されることは地域における住民自身による持続可能な行動と制度づくりであり、外部者の役割はあくまでもプロセスのファシリテーションに留まると述べている。本授業における受講生たちはこの外部者にあたる。また、久保田(2012)は、市民と学生が社会で現実に行き起きている問題に協働で取り組み、その解決に向けた実践活動(真正な活動: authentic activities)がそのまま社会貢献につながるような教育の必要性を説いている。そこで、本授業では「地域住民のエンパワーメントを目指し、地域住民と協働し、地域の多文化共生に貢献できる企画を考え、実行に移す」ことを目標に授業を展開することにした。

1-2. 授業の流れ

本授業は日立市役所との連携により行われた。発端は日立市職員から茨城大学日立キャンパス³に在籍している外国人留学生と地域住民との関係構築を目指した活動をしてほしいとの要望を得たことにある。そこで、本授業では「日立キャンパスの学生（以下「日立学生」と示す）を地域住民とつなぐ」にテーマを絞り、授業をデザインしていくこととした。飯盛は、地域・大学の連携の可能性として「地域の人々、大学の教員や学生が、立場をこえて、ヒト、モノ、カネ、情報という資源を持ち寄り、対等に、真摯に議論していくことで地域の課題解決につながる何かの実践が生まれる」（飯盛、2015:94）と述べている。さらに、そのポイントは、学生たちはあくまでもよそ者として地域に赴き、主役は地域の人々であるという姿勢を貫くことであると指摘している。以上のことから、本活動にお

表1 「地域社会と異文化コミュニケーション」授業内容（2015年度）

	学内／授業時間	学外／授業時間外
第1回	ガイダンス：本授業の概要、問題提起	
第2回	PLAについて(1)	日立団体 α ・ β および日立学生（日本人・留学生）に連絡を入れチームを作る。
第3回	PLAについて(2) および 今後の活動計画を立てる	
第4回	多文化共生について	
第5回	調査手法（インタビュー調査法）について	
第6回	プレゼンテーション&ディスカッション(1)：経過報告 フィールドワーク準備	
第7回	日立市にてフィールドワーク(1)：関係構築、今後の活動についての打合せ、調査等	
第8回	プレゼンテーション&ディスカッション(2)：フィールドワーク(1)までの成果および課題	関係者と連絡を取り合い、課題解決に向けて実行可能な企画を立て実践につなげていく。
第9回	課題解決に向けての企画・実践準備(1)	
第10回	課題解決に向けての企画・実践準備(2)	
第11回	日立市にてフィールドワーク(2)：実践活動準備または実践活動 等	
第12回	プレゼンテーション&ディスカッション(3)：フィールドワーク(2)までの成果および課題	関係者と連絡を取り合い、課題解決に向けて実践的に動く。
第13回	活動報告準備	
第14回	プレゼンテーション&ディスカッション(4)：活動報告（日立市役所職員および日立団体 α ・ β を交えて）	
第15回	振り返り、総括	活動をどう繋げていくか

いても、本授業の受講者である水戸キャンパスの学生はあくまでも媒介者に徹し、最終的には活動の主導権を日立市民に移行していく（地域住民が主役になる）ことを目指した。

第1回の授業では、受講希望者に、日立市役所から提起された問題および日立キャンパスの国際交流サロンの様子について説明した。その上で、水戸キャンパスの学生（以下「水戸学生」と示す）、「日立学生」、日立市のボランティア団体⁴（市内で10年以上活動している某国際交流団体と某学区コミュニティ推進会の2団体。以下、前者を「日立団体 α 」、後者を「日立団体 β 」と示す）と合同でチームを作り、活動をしていくことを伝えた⁵。この時点で、本授業の受講者は日本人学生18名、留学生（交換留学生および学部研究生）10名⁶（中国5名、台湾2名、ベルギー1名、ベトナム2名）計28名となった。その後、「日立学生」および「日立団体 α 」「日立団体 β 」とのチーム形成に入る前に「水戸学生」内でグループを作ってもらった（日本人3~4名+留学生2名の混合グループを5つ形成）⁷。

第2~6回の授業と並行し、授業外の時間を用いて、チームビルディングをするよう「水戸学生」に伝えた。このチームビルディングの意図は、日立市役所の助けを借りながら、「水戸学生（日本人と留学生）」が媒介となり、日立市内において「日立学生（日本人と留学生）」と「日立団体」との接点を作り、協働により両者のつながりの強化を図り、最終的には主導権を「水戸学生」から「日立学生」および「日立団体」に移行していくというものである（図1参照）

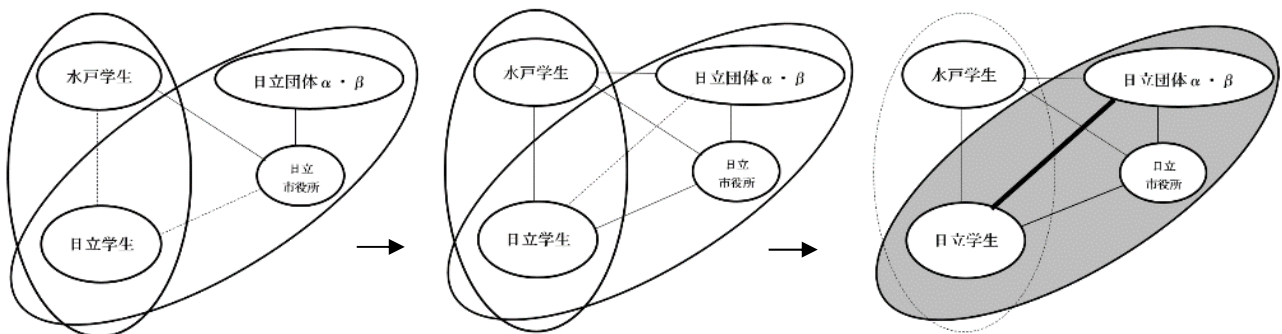


図1 「つながり」の構築にともなう活動主導権の移動（目標）

以下、「水戸学生」の各グループが「日立学生」「日立団体」と形成したチーム（A~E）のメンバー構成を図に示す（図2参照）。チームA、D、Eは3者合同という条件が全てそろったが、チームBとCは「日立学生（Bは日本人および留学生、Cは留学生）」とつながることができなかった。このことから、「日立学生」が、大学外の「日立団体」だけではなく、同じ大学の学生である「水戸学生」とも関係構築を積極的に図らない傾向があることがうかがえた。その理由として「日立（工学部）は勉強が忙しくて学外活動に費やす時間がない」と、多くの「日立学生」が挙げていた。それは日本人だけではなく留学生も同様であると考えられる。

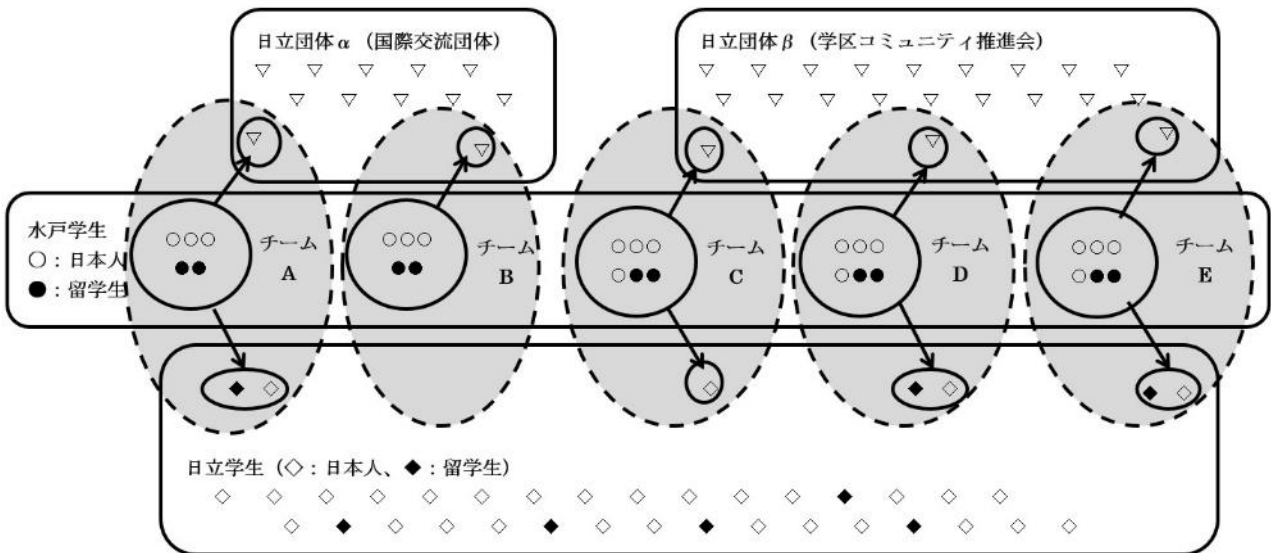


図2 各チームのメンバー構成

1-3. 各チームの活動内容

各チームの活動内容および成果の概要は以下の通りである。

【チームA】

「日立学生（留学生）」およびその家族の日本語能力向上支援を目的とし、「日立団体α」（日本語教室）のポスター（日本語版・英語版・中国語版）を作成、日立キャンパス国際交流サロンに掲示した。また、茨城大学留学生センターのFacebookに「日立団体α」の情報を掲載してもらった。さらに、「日立学生（留学生）」とともに「日立団体α」の〈年忘れ会〉に参加し、つながりを強化した。

【チームB】

日立市の魅力を広めるべく、市内デートコースを考案し、「日立団体α」の〈年忘れ会〉で発表した。また、日立市内の店舗・施設を取材し写真入りの地図を作成し、「日立団体α」に提供した。

【チームC】

日立駅から日立キャンパスまでチームで歩き、町の現状を把握した。その上で、日立市および本活動（各チームの活動）をPRするためのHPを作成した。

【チームD】

日立市のゴミ問題解決のためにチームで留学生および日立市環境衛生課を対象にヒアリング調査を実施した。新たなゴミカレンダー（簡略化／曜日穴あき）を作成し、留学生宅

チームD 活動風景および成果物



に配布、さらに、国際交流サロンにも掲示した。「日立団体β」は不動産業者および日立市にこのカレンダー使用を働きかけた。

【チームE】

「日立学生（留学生・日本人）」と「日立団体β」をつなぎ、ともに参加できるイベントの企画を提案した。2016年度に開催予定の「日立団体β」の活動において、2名の「日立学生（留学生）」が母国の話をするようになった。

1-4. 活動の成果と課題

本節では、「水戸学生」が記入した振り返りシート（中間および期末）および「日立学生」「日立団体」を対象に実施したアンケート（自由記述）をもとに本活動の成果と課題について考察していく⁸。

フィールドワークを実施する前の準備段階では、多くの「水戸学生」が“どう動いてよいか／チーム形成ができるかどうか／成果があげられるかどうか「わからないという不安」”を抱えていた。しかし、「行動」に移していくことにより、それらの不安は「自信」「自主性」へと変わっていった。さらに、フィールドに出ていくことにより不安は一気に軽減されていった。その一つの理由として「直接接触」による「関係構築」が挙げられる。また、「真正（authentic）」な現場に実際に足を運び地域住民とともに「課題」および課題解決の糸口が見つけられたことも不安軽減の一因となっていた。授業終盤になり、自分たちの一歩が大きな活動につながってきたこと、日立市役所および「日立団体」から「評価」が得られたこと、本活動が契機となり「日立団体」と「日立学生」の結びつきが見えてきたことは、「水戸学生」の「自己効力感」を強化していったと考えられる。

日立の留学生は普段日本人学生と交流していない人がかなり多いと思います。今回のような活動は留学生と日本人の学生たちの繋がりも作れて、その点は留学生たちにとっていいと思います。また今回のような活動があれば参加したいと思っています。（日立学生（留学生））

さらに、多様な人々との「協働」は「文化の多様性／流動性」への気づきにもつながっていた。

「異文化」という言葉に対して私は今まで「海外」「外国人」というような印象しか抱いていなかった。普段外国の人と接する機会が少ない私は「異文化」と言う単語はどこか遠い存在に思っていたのだ。しかし、日立市を訪れた際、同じ県内であるにも関わらず日立について知らないこと、また水戸での生活との相違点が想像以上にたくさんあったことを実感した。また実際に「日立団体β」の方々と交流した際にも、お年寄りが多かったために、普段関わらない世代と交流できたという事で、このことも「異文化交流」と捉えることができるのではないかと感じた。（水戸学生）

以上の意見からは（以下、図3参照）、留学生と日本人学生の差異は元々異文化として捉えられやすいが（境界A）、本活動を通して、水戸、日立という地域の差異（境界B）、年齢または組織（大学、ボランティア団体）の差異（境界C）も異文化になるのではないかという視点を「水戸学生」が得ていたことがわかる。石黒（2016）は、「コンテキスト間の移動（context shifting, CS）」⁹による多面的な現象理解はグローバル市民性の要請に寄与すると述べている。組織、属性、地域、トピック（地域の多文化共生）といった多様なコンテキストへの気づきを高め、移動を可能にする本活動は、異文化理解教育の一助となる可能性を含んでいるといえるだろう。

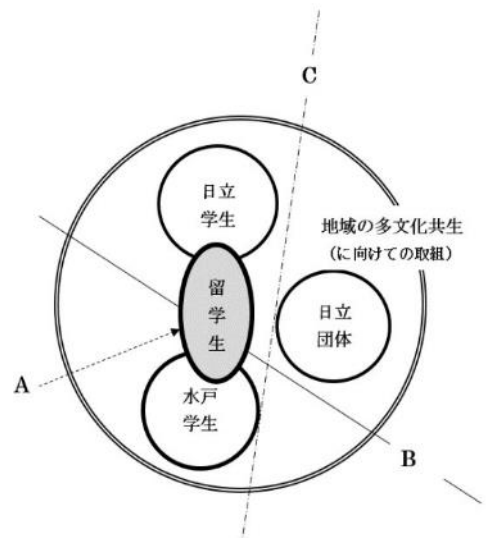


図3 多様な異文化（コンテキスト）

1-5. 留学生の観点から：「課題」「関係」「役割」「コミュニケーション」の関わり

テーマ設定およびチーム形成（媒介）において、チームに大きく貢献した留学生たちがいた。

ごみは自分の問題になっていることだったので、グループの皆に伝えた。（略）そしてグループ全員に同意してもらった。（水戸学生（留学生））

（グループ内の）留学生の二人も、自身のごみ問題を自覚していることから日立の留学生のみの問題ではないと感じるとともに、留学生二人が活動に入りやすく、随所で活動のキーを握ってくれるのではないかと考えた。（水戸学生）

チームの日本人学生と（中国人の）Aさんをつなげるために飲み会を開いた。（水戸学生（留学生））

最初は言語問題のため授業のリズムに追いつけなかったが、グループのみんなが熱心に教えてくれたおかげでだんだん追いつけるようになった。そして授業中で学べた一番大切なことはつなぎ合わせることだと思う。グループ内だけではなく外へのリンクも非常に大切である。つなぎ合わせがないとグループの絆がなく活動ができない。（水戸学生（留学生））

グループに2人留学生がいたことで、日立の留学生とスムーズにつながる事ができたし、留学生ならではの視点をプロジェクトに反映させることができた。（水戸学生）

これらの意見からは、テーマ設定およびチーム形成（媒介）という「課題」のもと、留学生が「役割」を取得し、対等な「関係」を構築していく様子、また、その「関係」構築が「課題」達成に向けプラスの影響を与えている様子がうかがえる。さらに、留学生たちがそれらを通して「自信」「自己効力感」を得ていることも伝わってくる。

しかし、留学生の中には、活動の最後まで日本人とのコミュニケーションがうまくいかないと感じている者（以下「Bさん」と示す）もいた。Bさんの関心はグループ内の日本人との「関係」に留まっており、地域の「課題」に向けた意見はほとんど見られなかった。

たまに日本の三人が何を話しているか分からない時がある。（略）こんな中途半端な日本語で、うまく意見を伝えない上に、完全理解することもできないのは一番の弱点だと思った。言葉の問題により自分本来の人間関係の築き方を発揮できなかった。（水戸学生（留学生））

ただし、Bさんの日本語能力のレベルは、上述のコメントからも伝わるとおり、決して低くはない。それにも関わらず、日本語能力に問題があると感じてしまった要因の一つとして「役割」が見出せなかったことが考えられる。本活動を通して、「課題」は「関係」を構築する上での契機となり、その「課題」に対応すべく人々が「役割」を見出していく様子がうかがえた。「コミュニケーション」を図るから「役割」が見出せるのか、「役割」があるから「コミュニケーション」を図るのか、その方向性は定かではないが、両者が関わっていることは事実であろう。そして「役割」および「コミュニケーション」により「関係」は強化され、「課題」志向が高まることが考えられる（図4参照）。反対に、自らの「役割」が見出せないと、「関係」構築にコミットすることは難しくなり、結果、「課題」志向には至らないということが示唆される。

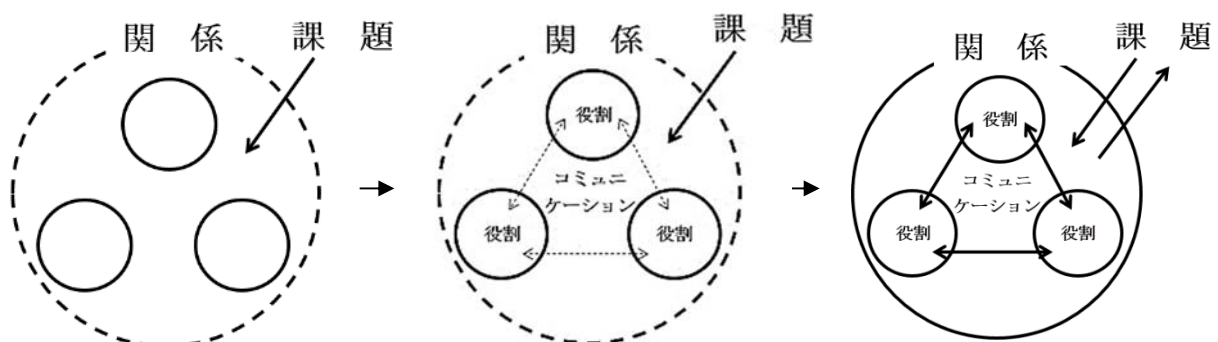


図4 「課題」「関係」「役割」「コミュニケーション」の関わり

2. 留学生と地域活動とのつながり再考：活動から1年を経て

活動から約1年を経た2016年10月、筆者は「日立学生」「日立団体（ $\alpha \cdot \beta$ ）」に、その後、両者

がどのように関わっているのか、本活動は意義のあるものであったのかどうかを尋ねた¹⁰。その結果、全員が「意義があった」と回答している。

作成してもらった「しおり」は学習者募集の友好手段（武器）として活用させていただいております。（略）活動の波紋は大きかったと思います。（日立団体α）

留学生2名に高齢者の集まりでお国の話をさせていただきました。非常に好評でした。（日立団体β）

意義はあったと思います。良い結果として反映されているかは難しいですが、一番の成果は何が問題であるか、なぜその問題が起きているか、が明確になったことだと思います。（日立学生）

しかし、活動に参加したメンバーは「日立団体」と「日立学生」をつなぐ媒介者として現在も動いているが、「日立団体」と「日立学生」との間、活動に参加した「日立学生」と参加していない「日立学生」との間には温度差が見られる。

「日立学生（留学生）」の歓迎会にチューターからの招待があり参加させてもらいました。参加した学生が少なく、理由を聞くとバイト等で参加できないとのことでした。（略）結論は、つながりができたところもあり現在進行中というところです。（日立団体α）

先日、「日立学生」のCさんに声をかけて、清掃センター見学会を予定していたのですが、部活、バイト等で日程が折り合わず、（略）地域の運動会への参加を依頼しましたが、時期が合わず参加して頂けませんでした。（日立団体β）

日立市役所からは直接、「日立団体β」からはDさん経由で連絡をいただいたことがあります（EメールまたはLINEで）。学内にポスターが掲示されているのは見たことがあります。私もそうですが、ポスターは見ても中身を読まないことがあります。口コミによって「〇〇が参加するから私も」というのが有力だと考えますが、最初の発信者になる人が、私も含め、情報をうまく受け取ったり発信したりができないように感じます。（日立学生）

これらの意見からは、留学生も含めた大学生が継続的に地域活動とつながることの難しさが浮かび上がってくる。加えて、他方面からではあるが「留学生はアルバイト等が忙しいので、何らかのメリットがないと地域の活動には参加してこない」（某国際交流団体主催者）、「ボランティアとして留学生に

継続的に地域活動に参加してもらうのは難しい。定住外国人の方々と比べると地域住民としての意識が低い」(某高等学校教員)といった声も聞かれる。さらに、外国人が自国の文化を紹介するという活動については、関係構築の契機になるだけではなく自国アイデンティティの保持にもつながるが、その一方で日本(人)と〇〇(人)といった2項対立的な「差異」を強調し、ステレオタイプの意味構築の誘因にもなる(オーリ 2015)といった意見も挙げられている。

そこで、これらの現状を踏まえ、筆者は、大学の留学生交流サークルに属し多くの留学生と関わってきた日本人学生(以下「Xさん」とする)を調査協力者とし、留学生がこれまで地域とどのように関わってきたかについて非構造化インタビューを実施した。Xさんはこの1年間に留学生たちが関わった地域活動を4~5つほど挙げたが、その全てが市町村・国際交流団体・大学関係団体等が企画したイベント性の高い単発の活動(例えば、〇〇祭り/フェスティバル、〇〇大会、〇〇交流会、〇〇ツアー等)であった。また、それら地域イベント主催者と留学生の間には必ず両者の接点となる媒介者(交流サークル等で親しくしている日本人学生、留学生と関わりのある教職員等)が存在していた。つまり、地域(団体)から話を持ちかけられたその媒介者が留学生に声をかけることにより、留学生は地域活動(イベント)に参加しているという形がデフォルトになっていたのである。これらの活動における媒介者の働きは、偏見低減方略の一つである拡張接触効果¹¹(Wright, Aron, McLaghlin-Volpe, & Ropp, 1997)と関連しており、重要な役割を果たしていると考えられる。実際、2016年度に本授業において実施した「留学生モニターツアー」¹²には約50人の留学生が参加しているが、これも受講生および教職員が留学生と地域の媒介となり実施したイベントであった。さらに、学部留学生はアルバイトや勉強に時間をとられてしまうため、思い出作りをメリットとして捉えられる交換留学生よりも地域への参加度が低いのではないかとXさんは語っていた。時間的拘束のある継続的な活動、しかも報酬のないボランティアについてはなおさらであるという。Xさんの話は、上述した某国際交流団体主催者、某高等学校教員の話とほぼ一致している。

しかし、稀少ではあるが以下のような事例も挙げられる。筆者が媒介となり留学生のYさんは某地域活動とつながりをもった。その地域活動においてYさんは日本人のZさんと「関係」を構築していくとともに、ポスターやちらしを作成する「役割」を取得した。この時点で、地域活動と留学生Yさんをつなぐ媒介者は筆者から日本人のZさんに移行したと考えられる。さらに、Yさんは他のメンバーとも食事やホームステイなどを通じて親睦を深め(「コミュニケーション」)、活動メンバーから個(“Yさん”)として認識され、主体的に活動に参加するようになっていった。これは単なる一事例にすぎないが、前述した協働学習授業において浮かび上がってきた「役割」「関係」「コミュニケーション」といった要素がここでもみられたことは注目に値すべきことであろう。

3. 地域活動のあり方を再考する

本稿における事例から、留学生が地域活動にどのように関わっているのかを示す特徴として以下の4点が考えられる。

- (1) 留学生が参加する地域活動の多くは、県または市町村・各交流団体・大学関係団体等の組織が主催または協力している。
- (2) 留学生が“個（〇〇さん）”としてではなく“留学生”として関わる地域活動の多くは、単発のイベント（〇〇祭り（〇〇フェスティバル）、〇〇大会、〇〇交流会、〇〇ツアー等）である。
- (3) 留学生が地域活動に参加するには媒介者の働きが必要かつ重要となってくる。
- (4) 留学生が日常に根差した特定の地域活動に継続的に関わっていくには、留学生が主体的に活動に取り組める活動環境、例えば、関係構築（留学生が個（〇〇さん）として認識され、役割取得できる等）、学び（研究あるいは言語・文化習得等）、場合によっては金銭的報酬等が得られる仕組みについて考慮していく必要がある。

これらは、留学生に限ったことではなく大学生、ひいては地域住民全般が地域活動に関わる場合においても言えることなのではないだろうか。誰のための何のための地域活動なのか？——今、多文化共生に向けた地域活動のあり方を問い直す時期にきていると筆者は考える。地域活動をデザインし、人々を媒介する立場にある者として、筆者自身、これからの地域活動のあり方、留学生をはじめとした人々とのつながりについて再考していきたい。

注

- ¹ 現在は人文社会科学部。
- ² 本稿は、横溝(2017)をもとに加除修正の上、執筆したものである。授業の詳細については前掲書を参照のこと。
- ³ 日立キャンパスには工学部がある。
- ⁴ 日立市市民活動課の紹介により接点をもつことができた。
- ⁵ 授業のガイダンスを聞き、約3分の2の日本人学生が席をたった。
- ⁶ 日本語能力レベルはN2～N1（中級から上級）である。
- ⁷ 本稿では、「水戸学生」内で形成した集団を「グループ」、「水戸学生」「日立学生」「日立団体」合同で形成された集団を「チーム」と示すこととする。
- ⁸ シートに書かれた内容をできる限り文脈に沿って切片化し、意味づけを行った。次にそれらをKJ法を用いて分類しカテゴリーを抽出した。それらのカテゴリーは「」付けの**太字**で示す。なお、**斜体太字**は振り返りシートから得られたローデータを示す。
- ⁹ 「実践者が、自己、他者、自他の関係性を含む眼前に立ち現れる現象を単純化し否定的に捉えている状態から抜け出し、新しい視点や理解を得るために、複数の異なる認知的枠組（具体的にはコンテキスト）へ移動すること」（石黒, 2016:37）
- ¹⁰ メールを通して各人とやりとりをした。
- ¹¹ 自分が属する集団（内集団）の中に外集団のメンバーと親しい関係にある者がいると知るだけで、その外集団に対する態度が好意的になるという効果。
- ¹² 茨城県国際観光課との連携により実施した。

引用文献

- 飯盛義徳 (2015)『地域づくりのプラットフォーム：つながりをつくり、創発をうむ仕組みづくり』学芸出版社.
- 石黒武人 (2016)「現象の多面的理解を支援する「コンテクスト間の移動」に関する一試論：グローバル市民性の醸成に向けて」『順天堂グローバル教養論集』第1巻, 32-43.
- 勝間靖 (2000)「アプローチとしての PLA」プロジェクト PLA 編『続・入門社会開発—PLA：住民主体の学習と行動による開発』国際開発ジャーナル社 pp. 218-224.
- 久保田賢一 (2012)「知識基盤社会の大学教育」久保田賢一・岸磨貴子編『大学教育をデザインする：構成主義に基づいた教育実践』晃洋書房 pp. 1-13.
- オーリ リチャ (2015)「「〇〇国を紹介する」という表象行為—そこにある「常識」を問う—」『2015年度異文化間教育学会第36回大会発表抄録』122-123.
- Wright, S. C., Aron, A., McLaghlin-Volpe, T., & Ropp, S. A. (1997) The extended contact effect: Knowledge of cross-group friendship and prejudice, *Journal of Personal and Social Psychology*, 73, 73-90.
- 横溝環 (2017)「地域住民の関係構築の契機となる多文化協働学習授業—PBLにPLAを取り入れた授業デザインおよびその実践報告—」茨城大学人文学部紀要『人文コミュニケーション学科論集』22, 163-178.